

校訓	盡己	令和6年度学校通信 「松中だより」 第7号	発行日	令和6年6月25日
教育目標	未来を創造し、たくましく生きる生徒の育成 ～地域・家庭とのつながりによる レジリエントな学校を目指して～		発行者	伊丹市立松崎中学校 校長 今井 克己

### 【忘れてはならない日】

メディアでも多く取り上げられていましたが、6月23日は「沖縄慰霊の日」でした。「日本が忘れてはならない日」として、

6月23日 沖縄慰霊の日

8月 6日 広島原爆の日

8月 9日 長崎原爆の日

8月15日 終戦記念日



の4つが取り上げられていました。79年前、日本で唯一の地上戦が行われ、多くの方が命を落としました。(日米の軍人、沖縄県民あわせて約20万人) 日本軍が組織的な戦闘を終結したのが6月23日です。

広島や長崎については学習していますが沖縄についてはいかがでしょうか？ひとつでもいいので、沖縄戦についての新聞記事やネット上のニュースに目を通してほしいと思います。大事なことは

「忘れてはならない」「繰り返してはならない」ということです。

自分たちや自分たちの子どもの未来ために、しっかり学ばなければなりません。

裏面の詩は6月23日沖縄全戦没者追悼式で朗読された「平和の詩」です。

### 【7月の予定】

5日(金) 2年トライやる・ウィーク発表会

6日(土) 7日(日) 伊丹市総合体育大会

9日(火)～11日(金) 三者懇談会

18日(木) 大清掃

19日(金) 1学期終業式

20日(土)～ 阪神地区総合体育大会

22日(月)～24日(水) 学習会



2024 平和の詩 「児童・生徒の平和メッセージ」 詩部門高校の部 最優秀賞

「これから」

沖縄県立宮古高校3年 仲間 友佑

短い命を知ってか知らずか  
蝉が懸命に鳴いている  
冬を知らない叫びの中で  
僕はまた天を仰いだ

あの日から七十九年の月日が  
流れたという  
今年十八になった僕の  
祖父母も戦後生まれだ  
それだけの時が  
流れたというのに

あの日  
短い命を知るはずもなく  
少年少女たちは  
誰かが始めた争いで  
大きな未来とともに散って逝った  
大切な人は突然  
誰かが始めた争いで  
夏の初めにいなくなった  
泣く我が子を殺すしかなかった  
一家で死ぬしかなかった  
誰かが始めた争いで  
常緑の島は色を失くした  
誰のための誰の戦争なのだろう  
会いたい、帰りたい  
話したい、笑いたい  
そういくら繰り返そうと  
誰かが始めた争いが  
そのすべてを奪い去る

心に落ちた  
暗い暗い闇はあの戦争の副作用だ  
微かな光さえも届かぬような  
絶望すらもないような  
怒りも嘆きも  
失くしてしまふような  
深い深い奥底で  
懸命に生きてくれた人々が  
今日を創った  
今日を繋ぎ留めた  
両親の命も  
僕の命も  
友の命も  
大切な君の命も  
すべて

心に落ちた  
あの戦争の副作用は  
人々の口を固く閉ざした  
まるで  
戦争が悪いことだと  
言うてはいけないのだと  
口止めするように  
思い出したくもないほどの  
あの惨劇がそうさせた

僕は再び天を仰いだ  
抜けるような青空を  
飛行機が横切る  
僕にとってあれは  
恐れおののくものではない  
僕らは雨のように打ちつける  
爆弾の怖さも  
戦争の「せ」の字も知らない  
けれど、常緑の平和を知っている  
あの日も  
海は青く  
同じように太陽が照りつけていた  
そういう普遍の中にただ  
平和が欠けることの怖さを  
僕たちは知っている

人は過ちを繰り返すから  
時は無情にも流れていくから  
今日まで人々は  
恒久の平和を祈り続けた  
小さな島で起きた  
あまりに大きすぎる悲しみを  
手を繋ぐように  
受け継いできた

それでも世界はまだ繰り返してる  
七十九年の祈りでさえも  
まだ足りないというのなら  
それでも変わらないというのなら  
もっともっとこれからも  
僕らが祈りを繋ぎ続けよう  
限りない平和のために  
僕ら自身のために  
紡ぐ平和が  
いつか世界のためになる  
そう信じて

今年もこの六月二十三日を  
平和のために生きている  
その素晴らしさを噛みしめながら